

天童山景德寺と如浄禪師と道元禪師

横浜善光寺留学僧育英会理事

東 隆 眞

天童山景德寺てんどうざんけいといとくじ (太白山天童寺たいはくざんてんどうじ)

天童山景德寺という名称は、今からおよそ七
百五十年以上もむかし、わが国鎌倉時代に道元
禪師がお書きになった『正法眼蔵』そのほかの撰
述に出てくるところで、くわしくは、太白名山
天童景德寺とよんでいたらしいが、現在は太白
山天童寺という。いまは、道元禪師にちなんで、
そのころの寺名の天童山景德寺をもちいること
にするので、あらかじめお断りしておきたい。

天童山景德寺は、中華人民共和国浙江省寧波
市鄞県の東方およそ三九キロ、太白峯が、右に
鉢盂峯、中峯を、左に聿旂峯、玲瓏峯を背景と
する山麓にある。

今を去る一六九四年まえ、永康元年(三〇
〇)、義興法師が開いた。義興法師が山中で修行
しているところにどこからともなく一人の童子
が現われて、身辺の世話をしてくれた。不思議
に思つて訊ねると、実は太白星(金星)の化身
だという。そこで、人びとは、山を太白山、寺

を天童、法師を太白とよんだ。

それからおよそ四三〇年後、開元二〇年(七三二)、法璿禪師が法華經を讀誦しているとき、ひとりの天童が来て供養してくれた。これによって、天童の名が生れたともいう。開山義興法師が草庵を結んだところは古天童といっている。天童寺から右に二キロばかり離れており、法璿禪師が太白精舎として修行していたところは、太白嶺の東方に位置し、すなわち現今の天童寺がそれにあたるといわれる。

その後、咸通一〇年(八六九)天壽寺、景德四年(一〇〇七)景德寺と改名し、洪武二五年(一二五二)天童寺、順治一六年(一六五九)弘法寺とよんだこともある。

天童山景德寺は、南方四明第一の名山といわれ、明代には禪宗五山第三位に列せられた禪宗系の古刹、名刹、大刹である。一九五〇年のころ、プロレタリア文化大革命、四人組によって

破壊されたが、一九八〇年以後、中国政府の援助七五〇〇〇〇元(約一〇億円)によってほぼ旧に復した。

その敷地面積は五八、〇〇〇平方米、建築面積は二五、〇〇〇平方米で永平寺の約二倍に相当し、一二〇余棟が藁を並べている。

そのむかし、天童山景德寺の住職であった如浄禪師に師事して道元禪師は決定的な宗教体験を得たのであった。まさに、景德寺は日本曹洞宗発祥の聖地と言つてよい。日本の曹洞宗大本山永平寺は中国の天童山景德寺を模範として建造されたといい、中国側では永平寺を小天童とよんでいるとのことである。如浄禪師に私淑した日本の曹洞宗太祖鑿山禪師の開創地能登の洞谷山永光寺(石川県羽咋市酒井町)の開山堂は如浄禪師を高祖としておまつりし、天童山とよんでいる。

道元禪師の寂後、その門下、門流は、天童山

景德寺に拝登をつづけ、交流を密にして今日に至っている。

私は、ほかのところでも二度ばかり書いたことがあるが、ここでも再び三度び記して、天童山景德寺の存在意義を宗門の伝統史の上から顕彰しておきたい。

かつて天童山景德寺では、この寺院を雪山せつせん（すなわちヒマラヤを指す）。更にいえばインドの釈尊のお寺としてうけとめられていたようである（鎌倉の浄土宗大本山光明寺法主藤吉慈海上人が昭和九年夏、天童山を訪れた時、羅漢堂の柱に「此処便是雪山」などと書いた札が下がっていた。いまも大雄宝殿の須弥壇のうらの魚藍観音像の上部の扁額に「大雪山」と記してある）。インドの釈尊のお寺といえ、それは祇園精舎である。中国の祇園精舎は天童山景德寺である。天童山景德寺を模した日本の吉祥山永平寺と、天童山と名づける開山堂をそなえる洞谷山永光寺

は日本の釈尊のお寺である。こうして、釈尊の教えが一貫してインド（雪山）、中国（天童山景德寺）、日本（吉祥山永平寺と洞谷山永光寺）と脈々と流れ、その余芳を私どもは頂礼しているのである。

私は、昭和六二年三月二日から四月二日まで、第一回道元禪師祖跡巡拝訪中団を編成して、日中友誼の実を深め、道元禪師ゆかりの祖跡を巡拝した。その間、四月一日、午前五時に起床し、団長としての私は、天童寺大雄宝殿（仏殿）で、導師となり、般若心経一卷、本尊上供をおつとめした。大雄宝殿のご本尊は、中央正面は釈尊である。その左右に薬師如来、阿弥陀如来がおまつりしてあるらしい。また、中央正面のご本尊釈尊の左右に阿難尊者、摩訶迦葉尊者が脇仕となっているようである。難値難遇の法縁に恵まれて本尊上供の導師をつとめている私の脳裏をよぎった観念は、釈尊を原点として、イ



天童山十景 その3

ンドを受けつき日本につらなつていくその分岐点、中心点としての天童山景德寺の存在感であった。

天童山景德寺と如浄たよじょうぜんじ禪師

道元禪師の仏法は、天童山景德寺、そしてこの寺院の住職であった如浄禪師を無視してうけとめることは出来ない。すでに触れたとおりである。

これまで如浄禪師の生涯については、必ずしも明らかでなかったが、先年上梓された恩師鏡島元隆先生（前駒沢大学総長）の名著『天童如浄禪師の研究』（昭和五八、春秋社刊）は、詳細をきわめる唯一の研究書である。

如浄禪師は、紹興三二年（一一六二）、浙江省紹興府に生れたようである。一九歳以前に出家したらしいが、一九歳に至って求道の旅に出た。臨済宗系の松源崇岳、無用浄全、拙菴徳光、遯

庵宗演らに歴参し、やがて曹洞宗系の雪竇山に住む智鑑（一一〇五―一一九二）に師事する。そして、智鑑禪師の後継者となるが、どのような経緯、証悟の内容であるのか、その時期はいつか、定かではない。

如浄禪師が曹洞の流れを汲む雪竇智鑑禪師のもとでどのように師資証契したかという点については、『統語録跋』（伝道元禪師撰）、『天童如浄禪師行録』（面山瑞方撰）、『五灯会元統略』などにするすが、その史実は定かではない。面山の『行録』の説は、瑩山禪師の『伝光録』、『洞谷記』と同調であるが、瑩山禪師は、これを道元禪師に端を発し、懐奘、義介にとつらなる室中の口伝から得たものであろう。いま、その『伝光録』の記事を訓読文におおして、左に掲げておく。

天童浄和尚、雪竇せつちやうに参す。

寶問うて曰く。淨子、曾て染汚せざる処、い
かんが淨得せん。

師(如淨禪師)、一歳余を経て、忽然とし豁悟
して曰く。不染汚の処を打す。

師は越上の人事なり。諱は如淨。十九歳より
教学を捨て祖席に參ず。雪竇の会に投じて、す
なわち一歳を経る。尋常、坐禪すること拔群な
り。ある時、ちなみに淨頭を望む。時に寶問う
て曰く、曾て染汚せざる処、いかんが淨得せ
ん。もし道い得ば汝に淨頭を充ん。師、措くこ
となし。兩三箇月を経るに、なお、いまだ道い
得ず。ある時、師を請して方丈に到しめ問うて
曰く。先日因縁道得すや。師、擬議す。時に
寶示して曰く。淨子、曾て染汚せざる処、いか
んが淨め得ん。師、答えず。一歳余を経る。寶
また問うて曰く。道い得たりや。師、いまだ道
い得ず。時に、寶曰く。旧窠を脱して、まさに
便宜を得たり。いかんぞ道い得ざらん。しかし

より師聞きて力を得、志を勵まし功夫す。一
日、忽然として豁悟し、方丈に上りて、すなわ
ち曰く。それがし道得すと。寶曰く。這回、道
得せよ。師、不染汚の処を打すという。声いま
だ畢わらざるに、寶すなわち打つ。師、流汗し
礼拝す。寶すなわち許可す。

如淨禪師は、嘉定三年(一一二〇)四七、八歳
ごろから、広慧禪寺(南京)、瑞巖淨土禪院(浙江
省)、淨慈報恩光孝禪寺(浙江省)、瑞巖開善禪寺
(浙江省)、淨慈報恩光孝禪寺(浙江省)に歴住し、
そして天童山景德寺の住職となった。すなわち、
嘉定一七年(一一二四)秋入院し、宝慶二年(一二
二七)冬、退院した。道元禪師は、如淨禪師を天
童山景德寺の第三十代住職(『正法眼藏梅華』)
であったとし、瑩山禪師は、第三十一代住職(『洞
谷記』)であったと記している。また、開山義興
法師から数えて三十二代(白石虎月『禅宗編年

史』に置く説もある。

その言行については、門人たちの編録した『如浄語録』がある。また、その人となりは「欣然豪爽」(欣然は、生き生きとしてわらいよろこぶさま。豪爽は、気性が強くさっぱりしているさま)ということばで伝えられている。

法嗣に、孤蟾如瑩、石林 秀、無外義遠、田翁 頊、自庵師楷、癡翁師瑩、雪屋正韶、以道尊(以上、中国人僧)とわが道元禅師(日本人僧)の九人がいる。

門人に、虚堂智愚、寂円、文素、妙宗、唯敬ら三十人余がいる。

無際了派、無準師範、浙翁如琰らと親しく交流があったようである。

病いにかかり、天童山景德寺任職を辞任し、同寺の涅槃堂において、嗣承の本師・故智鑑禅師のために焼香し、後任に枯禅自鏡禅師を予言して遷化した。

遺偈は、「六十六年(一本に六十四年とする)

罪犯弥天、打箇踣跳、活陷黄泉、咦、從來生死不相于(罪犯、天に弥し、箇の踣跳を打す、活きて黄泉に陥つ、咦、從來、生死あいかかわらず)と伝えられている。

示寂の年時には、宋の紹定二年(一二二九)七月十七日と瑩山禅師の『洞谷記』には記されている。ほかに紹定元年説(一二二八)、宝慶三年説(一二二七)もある。

如浄禅師の墓塔については、私は、南屏山浄慈寺(浙江省、西湖の東南に位置する)の法堂とおぼしき建物の裏山にある「如浄禅師之塔」にぬかずき、導師となり、日本から持参した香一片を供えて読経回向した。とき(昭和六二年)の住持霊月法師のご案内をいただいた。

なお、浄慈寺には、昭和六一年、日本の曹洞宗が寄進した大梵鐘(高さ三、六〇メートル、口径二、三〇メートル、重量一〇、一七トン、杭

州製気機廠鑄造)が天王殿右手の新築した鐘樓におさまっている。鐘樓一階の壁面には、浙江省仏教協会副会長俞昶熙氏の「浄慈禅寺再建鐘樓記」がはめこまれている。浄慈寺は道元禅師の祖跡であり、靈月法師によれば如浄禅師は同寺第十三代の住職であった。あたりは西湖十景のひとつ「南屏晚鐘」として有名。

如浄禅師と道元禅師

二四歳(数え年)の道元禅師は、貞応二年(一二三三)、宋の嘉定一六年五月はじめ、日本を出て、宋国の明州慶元府(いまの寧波市)に到着した。

南宋時代、外国貿易の中心はやはり海港であった。それは明州(寧波市)であった。そして国内経済の中心地としての杭州であった。戸数三十万、人口はおそらく百五十万人にも達する世界最大の都市であった。(植村清二氏著『万里

の長城 中国小史』。道元禅師がインドや中国の洛陽、長安に足をのびさなかったのは、今更その必要がなかったのであろう。

慶元府の船舶中に停泊することほぼ二か月、同年七月、天童山景德寺にのぼり、住職無際了派禅師の会下に身を投じた。

この秋、近くの阿育王山広利寺の門を叩いているが、その翌年の嘉定一七年一月二一日、天童山の了然寮で知瘦という僧から無際了派禅師の嗣書を見せてもらい、その冬、諸方遍歴の旅に出る。

翌嘉祿元年(一二二五)春、再び天童山景德寺に登り、ときの住職如浄禅師に相見し、五月一日、面授の堂奥を許され、夏安居に身心脱落の大事を了畢し、安貞元年(一二二七)すなわち宋の宝慶三年の秋、如浄禅師から、宝鏡三昧、五位顯訣、芙蓉道楷禅師の法衣などを受けて、天童山を辞去した。この秋八月、如浄禅師の門

弟寂円（のちに越前大野の宝慶寺開山となる）
ほかとともに帰国したのであった。

さて、道元禪師は、如浄禪師に出会って、「身心脱落」という決定的な宗教体験をえた。道元禪師は如浄禪師について「人に逢ふなり」と感
激をこめて、書きしるしている。

道元禪師は、如浄禪師の「身心脱落」の話頭
を聞きえて、仏道を成就した。如浄禪師は、門
下に対して、つねづね祇管打坐を説いている。
祇管打坐は、迷いを捨てず、悟りを求めず、ひ
たすらにただ坐禅のみをひとすじに行うことと
ある。祇管打坐こそ身心脱落である。それゆえ、
道元禪師は、その膝下に集まってくる修行者た
ちに、身心脱落を体験することを口を極めて勧
誘している。

道元禪師の坐禅仏法を祇管打坐としておさえ
ると、その本質は自受用三昧であり、その形相
は結跏趺坐であり、その機能は身心脱落である。

祇管打坐は正身端坐（身）であり、沈黙（口）
であり、非思量（意）である。

道元禪師が如浄禪師に師事したメモは『宝慶
記』として伝わっている。加藤宗厚氏の調査で
は、道元禪師の代表的撰述『正法眼蔵』九五卷
のなかで如浄禪師について触れているのは三五
卷の多数にのぼるといふ。『正法眼蔵』だけでは
なく、その記録である『永平広録』一〇卷、『正
法眼蔵随聞記』六卷などにも如浄禪師の言行は
記されている。それらは、かの『如浄語録』と
は若干ちがっており、どこまでも道元禪師によ
ってとらえられた如浄像といった趣きがつよい。
それを要約すると、如浄禪師は、当時の俗化
した教界にすどい批判を投げかけ、自己をき
びしく律し、仏法に対するたしかな見識をそな
え、修行僧をあたたく親切に指導した、まれ
にみる高僧であった。

しかし、このような高僧の遺風は、道元禪師



との師弟の契りが結ばれたことよってのみ、わが日本国に伝えられたのであった。弟子は師によって育てられるが、師は弟子によっていよいよ顕彰されるといもいえよう。

ところで、さきにも触れたが、私は第一回道元禅師祖跡巡拝訪中団の団長として、昭和六二年三月下旬から四月はじめにかけて、日中友誼を念願し、道元禅師ゆかりの祖跡を巡拝させていたがいた。

太白山天童寺を拝登したとき、女性通訳の高麗萍さんによれば、道元禅師は寧波港の小白河（いまは暗渠になっている）に上陸して天童山に向ったという。天童山まで約二〇キロメートルはあるであろう「五仏鎮嶼塔」のあたりから、五体投地の全身礼拝行をくりかえしながら天童山に辿りついたのだという。そのことを確かめるにはあまりにも遠い過去の彼方の話ではあるが、史実の如何はともかくとして、今もそのような

話が中国に伝えられて残っていることに、にわかには天童寺に親近感をおぼえたのであった。更に、天童寺に入ると、葉石罷に、西禅堂（坐禅堂）に案内され、堂内に入り、数十名の僧侶とともに一炷の坐禅を体験することとなった。このとき、案内の僧が指さして、あの場所が道元禅師が坐禅したところだという。後方の左の隅の位置である。西禅堂の建物は最近建造された印象をうけたが、案内僧のことばは、妙に現実感をともなうて、私に迫ってくるのであった。

『伝光録』のしるるところによれば、天童山景德寺如浄禅師の会下で、およそ一五〇〇人を数える修行僧たちとともに、毎日、午前三時ごろから午後一一時ごろまでの約二〇時間にわたる猛烈な祇管打坐に専念して、「身心脱落」（身心を束縛する我執が脱落して、真実の身心を自覚する）という決定的な宗教体験を、次のように伝えている。

永平元和尚、天童浄和尚に参す。

浄、一日、後夜坐禪に衆に示して云く。

「参禪は身心脱落なり」と。

師（道元禪師。以下同じ）聞きて、忽然として大悟す。

方丈に上りて焼香す。

浄、問うて云く「焼香の事、作麼生」。

師、云く「身心脱落し来る」。

浄、云く「身心脱落、脱落身心」。

師、云く「這箇は、これ暫時の伎倆。和尚、妄りに某甲を印することなかれ」。

浄、云く「われ、みだりに汝を印せず」。

師、云く「いかなるか、これ、みだりに某甲を印せず」。

浄、云く「身心脱落」。

師、禮拜す。

浄、云く「脱落、脱落」

浄、云く「脱落、脱落」

また、雲水堂の一隅に、昭和五年一月一日、曹洞宗管長・大本山永平寺貫首秦慧玉禪師の名による「日本道元禪師得法靈蹟碑」が建立された（高さ二、七メートル、幅一、四メートルの自然石。四名山産の梅園石）。

表面の碑文は、

「日本道元禪師得法靈蹟碑 公元一千九百八十年秋吉日 日本曹洞宗管長大本山永平寺貫首比丘秦慧玉率衆朝礼天童山祖庭樹碑以表彰遺德 震旦居士趙撲初敬題並為頌曰 卓々禪師、早參尊宿、禪教兼通、梯航入宋、訪道天童、身心脱落、得法長翁、伝衣太白、建刹傘松、正法眼蔵、演義開宗、七百年後、徳沢弥隆、雲仍聯袂、來礼遺蹤、立碑獻頌、永仰高風」

とあり、裏面の碑銘には、

「ソレ凡七百五十年前吾が道元高祖初メテ中

国ニ入り先ズ当山ノ了派禪師ニ參ズ次イデ諸山歴洩一年後当山ニ還ル途次了派禪師ノ示寂ヲ知り失望帰国ヲ決ス偶々新任如浄禪師ノ高德ヲ聞キ喜ビ隨身ス一夜坐大衆睡眠ス浄祖喝シテ云ク參禪ハ須ク身心脱落ナルベシ只ダ打眠シテ箇ノ何ヲ為スニカ堪エント高祖聞イテ豁然大悟直ニ方丈ニ上リ焼香ス浄祖云ク焼香ノ事如何高祖云ク身心脱落シ来ル浄祖云ク身心脱落脱落身心ト高祖礼拝ス此時証契即通曹洞正脉嗣承実ニ一一二五年高祖二十六歳七月二日也高祖更ニ弁道二年後浄祖ノ嗣書頂相袈裟ヲ正伝帰国即チ知ル当山ハ日本曹洞宗発祥ノ聖地也浄祖若シ高祖ニ嗣法セラレザレバ吾ガ宗ノ今日ハ如何ナラン古来日本ハ中国ヨリ無量ノ文化ヲ伝受ス寔ニ報恩謝徳ハ仏教ノ家常ナリ吾等弥々仏道ニ精進シ以テ中日友好ノ円成ニ寄与セン至祝至禱聊カ勒シテ後ニ備ウ維時一九八〇年秋吉日 日本曹洞宗管長 永

平寺現任慧玉比丘敬誌印印」(原文のまま)とある。

如浄禪師と日本の曹洞宗との関係の二、三を付記しておく、まず、先述のとおり曹洞宗大本山永平寺(福井県永平寺町)と洞谷山永光寺(石川県羽咋市)には如浄禪師が奉祀されており、竜雲寺(岐阜県岐阜市)には如浄禪師の塔(脩重元如浄塔)が建立されており、薦福山宝慶寺(福井県大野市。開山寂円禪師はもと如浄禪師の門に学んだが、のち道元禪師を慕って来日し、その弟子となり、帰化した)には伝如浄禪師画像が伝承されている。また、大乘寺(石川県金沢市)には、如浄禪師愛用の扨子ぼんすが伝えられている。

なお加えておくと、平成二年(一九九〇年)十一月二十四日、曹洞宗大本山永平寺七十七世貫首丹羽廉芳禪師とその一行は、天童寺へ拝登。新装成った西桂堂に、「寂円禪師參学靈蹟碑」先



覚如浄禅師崇恩碑」の二基が建碑され、その除幕式が挙行されたのであった。「大本山永平寺友好訪中団随行記抄」(熊谷忠興師稿。「傘松」五六八号収録)によれば、両石碑の碑文に關して次のように記してある。

「さて、西桂堂両石碑の銘文を次に掲げておこう。先ず右側の『寂円禅師参学靈蹟碑』は趙樸初先生の揮毫、二基共に三メートル弱か、裏面の内容は

寂円禅師ハ一〇七七年洛陽ニ生レ年少ニシテ
当山ニ登ル吾ガ永平道元禅師モ当山ニ在リテ
共ニ住持如浄禅師ニ隨身ナリ師夙ニ道元ノ学
徳ヲ慕イ宝慶三年道元帰東ノ時随ワント欲ス
ルモ道元云ク浄祖老イタリ且ク湯薬ノ事ヲセ
ラレヨト同年七月十七日浄祖示寂ノ後師ソノ
遺骨ヲ持シテ翌一二二八年渡東道元ヲ京都ニ
訪ネ師事シ興聖寺越前永平寺ニオイテ須叟モ
離レズ道元示寂ノ後一二六一年大野銀盤峰ニ

入り時ノ大守伊自良氏ノ帰依ヲ受ケ一字ヲ創
建薦福山宝慶寺ト号ス門風大イニ振イタリ一
二九九年九月十三日大宋国ニ帰ラント遺言シ
テ円寂サル九十三歳ソノ嗣義雲和尚ハ当時衰
微セル永平寺五世ヲ董シ寺門ヲ復興シテ中興
ト称セラル誠ニ寂円禅師ノ遺徳ハ永ク日東ニ
輝キ正法ヲ護リ給フコト無量ナラン

維時一九八九年秋吉日

日本曹洞宗管長永平現任廉芳比丘敬誌

願主 宝慶寺 住持北野良道

協讚大本山永平寺、大野市、大野市日中友

好協会

と、また、この日法要の為、宝慶寺開山寂円禅師木像の写真が石碑の前に安置されていた。これは宝慶寺の団体が捧持されて誠を巾じたもの、一方、この亭の壁には天童寺側によって次の銘文がはめこまれていた。

「寂円禅師参学靈蹟碑因縁記略」

本山寺僧寂円(一一〇七年至一一九九年)

宋朝宝慶三年東渡日本国扇揚曹洞宗風七十余年並在大野郡銀盃峰麓創建宝慶寺成為日本曹洞第二道場日本宝慶寺尋源潮本知恩報德發願集淨資伍佰萬日元於公元一九零年歲次庚午仲秋敬立寂円禪師參學靈碑記此因縁俾垂永久天童禪寺常住謹啓 印

と、これに依つて石碑建立に因み五百万円が宝慶寺から、それと永平寺側からも同等の額が淨財とされて、両碑が円成したことが知られる。

次に左側の如浄禪師の碑には横に「先覚如浄禪師崇恩碑」と趙先生が揮毫され、その下に天童寺明暘法師が次の如く述べられている。

曹洞宗第十三世如浄禪師嘉定年間住持天童時有日本国僧人道元禪師前宗參學習禪在浄師座下得法回国後創立日本曹洞宗今日本曹洞援奮追懷源流盛恩根德稱淨資日元五百萬立崇恩碑因縁殊勝功德無量

師資道合勝前因 頌德崇恩碑盡陳

中日深誼德萬載 淡交相洪利人民

庚午中秋吉日 釈明暘恭贊□□

と、此にも永平寺から五百万円の助資のことが記録されている。そして裏面には「如浄禪師奉觀碑」と題して

天童如浄禪師八一六三年浙江省明州府ニ誕生十九歳ニシテ捨教帰禪諸方ノ叢林ヲ歴遊シ後曹洞ノ雪竇知鑑ニ嗣法ス五大宝刹ニ晋住即チ健康清源寺台州瑞巖寺臨安浄慈寺明州端巖寺再主浄慈寺明州天童寺ニ唯務打坐スソノ家風清廉ニシテ峻巖一一二八年病ヲ示シ偈ヲ書シテ曰ク六十六年罪犯弥天打箇躄跳活陷黄泉噴從來生死不相于ト七月十七日示寂世寿六十六歳ソノ法嗣無外義遠永平道元等九人參学人寂円等アリ昔吾が道元高祖中国ニ到ツテツイニ大白峰ノ浄禪師ニ參ジテ一生參学ノ大事ココニ畢リヌト即チ一一二五年五月仏祖正伝菩薩

薩戒ヲ稟受シ帰国スコノ大法相統ノコト高祖ノ著述正法眼藏等ニ悉出セリ正伝ノ大法道元高祖ニ嫡々相承シ爾来七五〇年浄祖ノ法乳今ニ霑ス遇々一九八〇年秋日本曹洞宗ノ法孫道元禪師得法靈跡ヲ建立セリ今亦法縁熟シ酬恩塔ヲ發願ス伝フルニ浄祖ハ天童山ノ南谷庵ニ塔セリト雖モ詳カナラズ日本の雲孫幾度カ旧跡ヲ覓メ竟ニ杭州浄慈寺裏ニ如浄塔ヲ認め一九八三年秋重建セリシカレドモ天童寺靈域ニ浄祖ノ碑ナキヲ憾ミ仏祖ヲ挙括シテ奉覲スル底ノ挙トナレリ此ニ些カ来由ヲ誌シ後備トス

維時一九九〇年秋吉日 日本曹洞宗大本山 永平寺現住比丘廉芳 敬誌

と、これに依つて日中友好の契り、愈々天童寺参拝の者をして両碑を仰いで得法修行の姿をば悼び新にされることであろうと思われた。「駒沢女子大学副学長、教授。駒沢学園女子中学高等学校校長。文学博士」

参考文献

左記の文献を参考ないし引用させていただいたことに対し深い謝意を表すものであります。

天童寺参拝記（大本山總持寺刊）

洞門の祖廟をたずねて（大本山總持寺刊）

道元禪師旧蹟紀行 小倉玄照著（誠信書房刊）

中国仏教の旅（美乃美社刊）

中国仏蹟見聞記第二集（駒沢大学中国仏教史

蹟參觀団刊）

洞谷記に学ぶ 東 隆眞著（曹洞宗宗務庁刊）

天童寺志・天童寺続志（太白山天童寺刊）

道元小事典 東 隆眞著（春秋社刊）

中国仏教の寺と歴史 鎌田茂雄著（大法輪閣

刊）

天童寺拝登記 磯田英雄著（故丹羽廉芳禪師

刊）

中国仏教の儀礼 鎌田茂雄著（東京大学東洋文化研究所刊）

道元禪師祖蹟巡拝記（道元禪師祖蹟巡拝訪中団事務局刊）

道元禪師祖蹟巡拝(1)(2)―中国編― 東隆眞稿

〔無憂華〕②⑤②⑥ 駒沢学園刊）

永平寺参拝 東 隆眞編著（駒沢学園刊）

天童如浄禪師の研究 鏡島元隆著（春秋社刊）

天童寺世代考（三） 吉田道興稿（「禅研究所

紀要」第十七号 愛知学院大学禅研究所刊）

正法眼蔵のなかの仏祖 加藤宗厚編（公論社刊）

傘松 平成三年一月号（五六八号）―永平寺友

好訪中団特集― 発行所大本山永平寺（本誌

の提供、資料の整理等については中野良教師、

安藤嘉則師の御協力をえた。とくに記して感

佩する）

銅車馬

